

曲解

藤井 英次 教授

(国際金融論)

皆さんの多くはこの春に経済学部生になられた方々かと思います。このチャペル講和は「経済と人間」と題するシリーズとの事ですが、実は経済について考えるとは人間について考えることを意味します。経済と呼ばれる何か抽象的で難解な概念を想像する必要はなく、個人或いは集団として、私たち人間の取る行動や意思決定の仕方などについて突き詰めて考え、理解し、それを活かそうというのが経済学です。

さて、皆さんは今後繰り返し経済学のマントラ（唱え文句）を耳にされると思います。例えば、「この世に無料のものなどない」のように、経済学の基本原則を端的に物語るものです。しかし、いろいろな人とお話をしていると、これがしばしば曲解されて広がっていることに気付くのです。

「この世に無料のものなどない」とは、「一見無料に見えるものにも機会費用が存在し、その意味において真に無料のものなどない」という意味です。しかし、「何にでもお金がかかる」と捉えられ、そこから要は「世の中、全てはカネ次第」と曲解されてしまうことが多いようです。いえいえ、経済学が提供する真の教訓はその反対で、「世の中カネだけじゃない」と言うものです。そう、人はお金だけじゃ動きませんよと。

このことを示すよく知られた実例として、イスラエルの保育所で行われた実験について紹介します。保育所では時間通りに子供を迎えに来ない保護者が多いことが問題化していました。時間になっても保護者が来ないからと言って、保育士たちは預かった子供を放置して帰宅するわけには行きません。遅刻した保護者が慌てた様子でやって来て、申し訳ないと言えば、それ以上強く対応するのは難しいものです。とは言え、遅刻が常態化すると保育士たちは毎日のように残業を強いられ、自分の家族と過ごす時間が削られてしまいます。そこで、遅刻した保護者に罰金を科す制度を導入してはどうかという案が浮上しました。一見、いかにも経済学に基づく発想であるかのような印象を受けるのではないのでしょうか。

では、実際に罰金制度を導入してみた結果、どうなったと思いますか。実は罰金が導入されると、予想に反して遅刻は寧ろ増加したのです。なぜでしょうか。罰金導入前、保護者は勤務時間外にまで保育士に子供の面倒を押し付けるのは申し訳ないと、遅刻する事について罪悪感を抱いていました。それは道義的な問題であり、礼儀の問題でした。しかし、それを罰金、つまりカネの問題に置き換えた途端、「なんだ、お金を払えば済むことなのか」と、遅刻という行為の意味が変わってしまったのです。すると、「お金を払うのだから」とためらいもなく、堂々と遅刻す

る保護者が増えてしまったわけです。人間は結構複雑ですね。

講話の最初に、経済について考えるとは人間について考える事と言いました。それなら人間について考えるとは経済について考える事なのかというと、そうは言えません。そう言う経済学者がいるとすれば、それはただの傲慢です。保育所の例が示唆するように、（一般的な意味での）経済というレンズだけでは捉えきれない、上手く焦点が合わない複雑なものも抱えて生きているのが私たち人間という存在なのです。
